

# 浪江の



# こころ通信

・第2号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏（7県）の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。



「浪江のこころ通信／第2号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒976-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1  
男女共生センター内 浪江町役場二本松事務所  
「浪江のこころ通信」宛  
FAX.0243-22-4261



## 佐藤 博美さん

取材者：(特活) 山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田

取材日：7月12日

### 今できることをちょっとずつ

「放射能の影響で子どもたちがストレスを抱えて過ごすのなら…」と福島県内から離れる決心をし、いくつかの避難所を経て3月17日に家族、親戚の皆さんと山形県中山町へ避難。幾世橋小学校PTA会長を務める博美さんは、震災後、さまざまな方の協力を得て、全校児童の無事を確認することができたそうです。

震災当日は自宅にいましたが、請戸の実家が心配で見に行った途中、逆流する川をみて大変なことが起きていると思いました。5月26日に自宅へ一時帰宅をし、景色は懐かしいのですが、望んでいた景色ではありませんでした。それでも私たちの町であり、91歳になる祖母にも生まれ育ったこの地をまた踏ませてあげたい、子どもたちにもこの風景を見せたい、受け入れなければ前に進んで行けないと思っています。

一番不安なのは子どもたちのことです。現在、長男は中学校へ長女は小学校に通っています。同じ環境を整えても、どうしても前と同じことはしてあげられません。今は友達もでき元気に通ってくれています。入学式の朝の長男の落ち込んだ背中は今でも忘れられません。卒業式もさせてあげられず、県外の中学校に入学することに戸惑い、させなくてもいい不安な思いをさせてしまったと思えます。ですが4カ月たった今、小学校の先生や保護者の皆さんと協力して7月末に卒業式を行う準備をしています。少しでも多くの方が参加して、保護者の皆さんや子ども

もたちと会えるのを楽しみにしています。震災後、同級生の半分が県外に避難して多くの方の連絡先もわからない状態でしたが、さまざまな方の協力を得て、全校児童の無事を確認することができました。改めて自分たちの住んでいた幾世橋の地域の皆さんが、いかに子どもたちのことを考えてくれたか、また同じ地区で暮らして良かつたと思えます。今回、広報紙の発行が再開されたことも嬉しく、少しずつ前に進んでいることは間違いないと実感しました。

中山町の皆さんはあたたかく、行政の方や地域の方の協力で、生活環境も整い普通の生活ができるようになりました。ですが、望んでいる生活とはどこか違うと思うときもあります。私たちは浪江町民であり福島県民です。今は渡り鳥の休憩地点だと思っています。子どもたちの体に何らかの影響がある今は県内に戻れないと思っています。浪江町に帰れるよう一歩ずつ前進していきたいと思っています。



中山町の避難所前で長女綾ちゃんと。花壇に浪江町の花“コスモス”の種をまき、花が咲くのを楽しみにしています。

## 岡本 博之さん・真由美さん

取材者：(特活) 山形の公益活動を応援する会・アミル

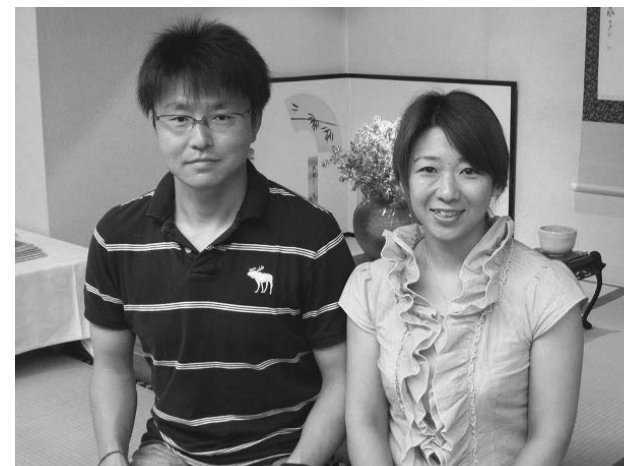
齋藤・柴田

取材日：7月11日



山形県

### 浪江町の皆さんとの心の絆を支えに



▲山形市内にて(左)博之さん、(右)真由美さん

原発事故による避難指示があり、3月17日に南相馬市の親戚14名と山形市へ避難。消防士の博之さんは、勤務地の楢葉町と山形市を行き来している。子どもたちが夏休みに入った8月にいわき市へ引っ越し予定。

震災翌日、原発事故による避難指示があり3月17日から山形市内に避難しています。現在、3人の子どもたちは山形市内の小学校に通っていて、日常的なリズムに慣れてきたので少し安心しています。今は二次避難先のホテルにいます。3か月間過ごした避難所では、教育委員会の先生による学習サポートやスポーツ教室の時間があつたり、美容師の方が定期的に訪問してくれたり大きな不自由はなく、子どもたちものびのび過ごすことができましたと思います。

現在は、役場からは離れているので情報への不安も多少ありますが、二本松にいる知人などを通じて情報を入手しています。手続きなどが後手後手になってしまおうと困るので、できるだけ直接二本松に行くようにしたいと思っています。

先日、長男が所属していた陸上クラブの大会があり参加してきました。陸上クラブの行事が家庭に溶け込んでいたこともあって、子どもたち同士の交流や父母の皆さんと懇親も無くなってしまったことは残念でした。しかし、子どもたちがこれまで努力して取り組ん

できたことは無駄にさせたくない。8月に行われる合宿にはぜひ参加させてあげたいと思っています。

3月25日には、父と息子1対1の初めての「男旅」をする予定でしたが、行くことができなくなりました。落ち着いたらそんな親子の触れ合いの時間もまたつくっていききたいと思っています。

また、私たちの住んでいた浪江町酒田の近くの河川敷で春に行われる「桜まつり」を今年も楽しみたいと思いましたが、花火も打ち上げられ家族や地域の皆さんの方が集うまつりを懐かしく思っています。

場所によってはまだ放射線量が高い場所もあり、帰町後子どもたちの体への不安がまだ残ることも事実です。しかし、こういう状況でこれまで見えていなかった心や絆が見えてきて、そのつながりを支えにしています。浪江町に帰れる日を楽しみにみんなで頑張っていきたいと思っています。



## 五十嵐英明さん

取材者：高崎経済大学 櫻井研究室  
櫻井・山本・亀井  
取材日：7月9日

### 請戸の海の朝日が見たい

震災後、請戸の自宅で津波に流された五十嵐さんは、レスキュー隊に助けられた。避難先を転々としながら家族と合流し、茨城県古河市の病院に勤める娘さんを頼って現在のアパートで二人のお孫さんと家族6人で生活している。



地震のあと津波に流されたが、レスキュー隊に助けられ難を逃れた。寒い暗闇の中で助けを求めている人が大勢いたはずだ。仲間やその家族には亡くなった方が多く、思い出すたびに心が痛む。

私は15歳のときから漁業一筋だったので、やっ



▲取材の様子

ぱり船で漁に出るの仕事がしたい。運転手の仕事や農業などの誘いもあるが戸惑っている。でも、家の中にじっとしているだけでは自分もつらいし、家族にも心配をかけてしまう。これから先どうしたらいいのか。何か海の仕事を見つけないかと思いついた。何か海の仕事をしたいと思いついた。何か海の仕事を見つけないかと思いついた。何か海の仕事を見つけないかと思いついた。

浪江町の多くの住民を集めて、今後についての話し合いの場をもつべきと思う。特に漁師は組合などが町単位ではないため、役場の役割が大きいと思っている。

ることがつらかったです。一番困ったことがトイレです。人数が多く、水洗トイレがなくなり、仮設トイレをつくることで忙しく大変でした。食料は固くなったおにぎりでさえも不足していました。賞味期限が当日のパン、カツプラーメンなどで水は届かない日もありました。15日に二本松の東和へ移動してからは、たくさん支援物資が運ばれるようになり物資配分の仕事で体を休める暇がなかったです。いま思えば、体を動かしていたことで考え事をせずにいたことがよかったです。いまは郡山市の一軒家を借上げ住宅としてもらい、姉夫婦と4人で暮らしています。震災以降、家族がばらばらになり、それぞれ今で住んだことのない集合住宅に転居しました。今まで開放的なところで育ってきた、急に周りに気を使うところに移ったためにストレスがたまっているように感じられます。この家に移ってから浪江町の人や避難所で一緒だった人に会いにっています。顔を見て「どうですか？」と声をかけ、話し相手をする中でお互いに安心できます。家でゆっくりすることよりも、外出したり体を動かすことで気が紛れます。やりたいこと一番は、みんなで一緒に帰りたいです。もし帰る日が来るとしたら「どこまで対応してくれるのか」、「生活の不安はどういうふうにかえてくれるか」というところが知りたいです。今、ボランティアをしている方に避難しているお年寄りや、体が不自由な方に2日に1回でいいから顔を見て「どうですか？」と様子を見てほしいです。避難所で看護師さんに体調を聞いてもらったり、血圧を測定していただいたりするだけで気持ちが安らぎました。妻も同じことを思っています。これから暑さで体調を崩す人がいると思いますので、声かけをしていただけたらと思います。子どもたちは、今でも少しの余震で怖がりです。大人が考えているより心の中はまだ癒されていません。早く自由に遊ぶことができるような日が来ることを願っています。



## 伊東 建策さん

取材者：高崎経済大学 櫻井研究室  
櫻井・竹内・篠木  
取材者：7月17日

### 地域の皆さんが集まる場、交流の場を取り戻せたらいい

津波で築7年目の請戸の自宅が流される。地震の時、学校にいた高校生の長男とは3月16日ようやく再会。新地町にある妻・育子さんの実家も余震で不安な状況となり、親戚を頼って千葉県松戸市の現在のアパートに移る。建策さんは福島原発の関連企業に現在も務め、数週間に一度、松戸市の自宅に戻る生活を続ける。

私も妻も浪江町出身ではないのですが、学校や地域のつながりなど、浪江町の人たちの助け合う密な人間関係が好きで、縁もあり海が見える請戸に居を構え生活を送っていました。

原発関連での今の仕事は、震災前よりも関係作業員が随分と減りました。一方で私のような地元の被災者の方々もたくさん作業に従事しています。少しでも復旧を進めるため不休で大変ではありますが、できる限り役割を果たさなければならないと思っています。

いまは子どもたちの学校のことが一番気になります。こちらの学校に子どもたちも慣れてきていますし、他方で受験を控えた息子を見てると元



▲(左から) 建策さん、真司くん(高2)、美緒さん(小4)、庄司くん(小6)、育子さん

の高校での友人のつながりを大切にして、福島県に戻るべきなのかと考えてしまいます。

震災前はなるべく子どもたちとの時間を作るようにと思い、浪江町柔道スポーツ少年団と一緒に汗を流していましたが、いまはそれも難しいです。

震災後も、変わらず同じ職場で働き、千葉県に移転はしても落ち着かない状況では、まだまだこれからの生活のことを描くことができません。ただ、浪江町から避難しているこの時間を無駄にはしたくない。このような環境にあっても積極的に生きていきたい。いつか地域の集まりや交流が取り戻せる日が来ることを願うばかりです。



## 佐々木保彦さん

取材者：特定非営利活動法人  
ビーンズふくしま 豊田  
取材日：7月13日

### いまま震災は続いています



子どもも、年寄りも体の不自由な人も、ひと声かけてもらえるだけで気持ちが安らぎます。

私は浪江町の消防団に所属していましたが、地震がおきた当時、出勤に向けて準備をしていましたが、12日の避難勧告により多くの町民が役場とともに津島へ行きました。あまりにも避難者が多く、避難所では食料・毛布が十分になく、まだ雪がふっている季節で寒さをがまんす



## 遠藤 健さん

取材者：特定非営利活動法人  
市民公益活動パートナーズ 佐藤

### 今は何も考えられません

6月26日に、福島市飯坂町平野の北幹線第一仮設住宅に、夫婦で入居しました。震災前は、妻と息子夫婦・孫2人の6人家族で、両竹に住んでいました。



▲まだ、カメラを向けられるのはちょっと…

津波で、7代続いた思い出の写真や住所録など、とにかく何もかもなくなってしまいました。家族6人は無事でした。息子はいわき、嫁と孫たちは福島市下鳥渡と家族がばらばらになってしまいました。つらい選択でした。震災前は北双方部のシルバー人材センターで、町のバスの運転手として、高齢者や子どもたちの送迎をしていました。

津波で、7代続いた思い出の写真や住所録など、とにかく何もかもなくなってしまいました。家族6人は無事でした。息子はいわき、嫁と孫たちは福島市下鳥渡と家族がばらばらになってしまいました。つらい選択でした。震災前は北双方部のシルバー人材センターで、町のバスの運転手として、高齢者や子どもたちの送迎をしていました。

津波で、7代続いた思い出の写真や住所録など、とにかく何もかもなくなってしまいました。家族6人は無事でした。息子はいわき、嫁と孫たちは福島市下鳥渡と家族がばらばらになってしまいました。つらい選択でした。震災前は北双方部のシルバー人材センターで、町のバスの運転手として、高齢者や子どもたちの送迎をしていました。

津波で、7代続いた思い出の写真や住所録など、とにかく何もかもなくなってしまいました。家族6人は無事でした。息子はいわき、嫁と孫たちは福島市下鳥渡と家族がばらばらになってしまいました。つらい選択でした。震災前は北双方部のシルバー人材センターで、町のバスの運転手として、高齢者や子どもたちの送迎をしていました。

津波で、7代続いた思い出の写真や住所録など、とにかく何もかもなくなってしまいました。家族6人は無事でした。息子はいわき、嫁と孫たちは福島市下鳥渡と家族がばらばらになってしまいました。つらい選択でした。震災前は北双方部のシルバー人材センターで、町のバスの運転手として、高齢者や子どもたちの送迎をしていました。

津波で、7代続いた思い出の写真や住所録など、とにかく何もかもなくなってしまいました。家族6人は無事でした。息子はいわき、嫁と孫たちは福島市下鳥渡と家族がばらばらになってしまいました。つらい選択でした。震災前は北双方部のシルバー人材センターで、町のバスの運転手として、高齢者や子どもたちの送迎をしていました。

津波で、7代続いた思い出の写真や住所録など、とにかく何もかもなくなってしまいました。家族6人は無事でした。息子はいわき、嫁と孫たちは福島市下鳥渡と家族がばらばらになってしまいました。つらい選択でした。震災前は北双方部のシルバー人材センターで、町のバスの運転手として、高齢者や子どもたちの送迎をしていました。



## 板倉 功さん

取材者：特定非営利活動法人  
ピースふくしま 豊田  
取材日：7月13日

### 生まれ育った「ふるさと」へ

なれない土地で暮らしながら、なじみの深い「ふるさと」浪江を思う



いま、私の家族は郡山市の兄夫婦の家で暮らしています。震災当時、津島に避難しました。ここは、街中から外れたところにあり、静かなところです。孫たちは学校にも慣れはじめ、安心してしています。しかし、この家は道路拡張のために、また転居します。

いま、私の家族は郡山市の兄夫婦の家で暮らしています。震災当時、津島に避難しました。ここは、街中から外れたところにあり、静かなところです。孫たちは学校にも慣れはじめ、安心してしています。しかし、この家は道路拡張のために、また転居します。

一時帰宅では、帰らない方がよかったと思いました。見たくない風景ばかりで…。草は伸び放題で、今まで見たことのない光景でした。野放しにされた家畜の今後が不安です。町の人とは電話で連絡をとっています。はじめて携帯電話をもってとどつた部分はありませんが、連絡が取れることで安心感があります。

浪江は、なにもない町です。あるのは自然と何代も続いてきた家業や歴史です。なにもなくても生まれてからずっと育ってきて、体も心もなじんでいる故郷で生活したいです。

いまは、明るいニュースを1つでも流してもらえるとうれしいです。震災以来、暗いことばかりです。原発事故の一日も早い収束で、震災からの復興と復旧が進むことを待っています。



## 青田 敦郎さん

取材者：特定非営利活動法人 ピースふくしま 中鉢  
取材日：7月16日

### また浪江で皆さんとお会いしたい



▲浪江の方に向かって毎日のお務めをされています。

大聖寺ご住職の青田敦郎さんは、寺のこと、檀家さんのこと、そして津波で亡くなった方の供養のことが気になり、なるべく近くにいたいと思ったそうです。現在は奥さまと子ども2人の4人家族で生活しています。

一時帰宅のときに、少しですがやっと寺のものを持っていくことができました。浪江の方のことが気になっていて、警察発表などはいつも気にしています。最近、檀家さんの情報もずいぶん入ってくるようになって、浪江町の役場にも大聖寺の行き先について問合せがあった

まだ、いつになるかわかりませんが、浪江に戻ることができたら、まわりの人たちと一緒に普通の生活ができたらというのが願いです。死んでしまっただけから、生きて浪江でお会いしたい。ご先祖が切り開いてきた地なのだから、そう簡単に浪江は捨てられないです。浪江にいたとしたら、今の時期はお盆の準備をしているところです。塔婆を書いたり、新盆の檀家さんをまわる準備ですね。でも、6月・7月と、DNA判定で津波で亡くなった方の身元が判明して、お葬式はずっと続いています。二本松だったり、福島だったり、原町だったり、ご家族が避難されている先に出向いてご供養をしてみたいです。

地震によって、これまであたりまえにできた普段の生活のありがたさを見直すきっかけにもなったのではないのでしょうか。価値観の変化というか、地域の共同体、きずなの大事さに改めて気付いた方が多いと思います。今後、要望できるとすれば、お盆やお彼岸にご先祖さまに手を合わせられる状況を整えてほしいと思っています。例えば、お盆にお墓参りにいけるようなバスなどがあると、新盆にもちゃんとお墓参りできる。そうすることで安心される方も多いと思います。

地震によって、これまであたりまえにできた普段の生活のありがたさを見直すきっかけにもなったのではないのでしょうか。価値観の変化というか、地域の共同体、きずなの大事さに改めて気付いた方が多いと思います。今後、要望できるとすれば、お盆やお彼岸にご先祖さまに手を合わせられる状況を整えてほしいと思っています。例えば、お盆にお墓参りにいけるようなバスなどがあると、新盆にもちゃんとお墓参りできる。そうすることで安心される方も多いと思います。



## 原田 勇真くん(小4)

取材者：NPO法人  
市民公益活動パートナーズ 松田

### おもいっきりサッカーが したい

浪江町幾世橋に住んでいて、震災当日は幾世橋小学校で下校の準備をしていた。

現在は、新潟県に単身赴任している父親と離れて、伊達郡桑折町の仮設住宅で母親と2人の妹と4人暮らし。同じ桑折町の仮設住宅の別棟に祖父と祖母も避難している。

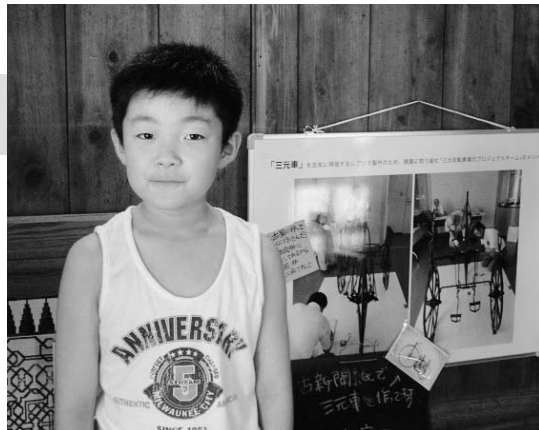
福島や東京など6カ所の避難所を移って、5月23日に桑折町の仮設住宅に引っ越してきました。幾世橋小学校は1クラスだったけど、醸芳小学校の4年生は2クラスあって、1クラス29人です。桑折町の学校でも友達ができ、毎日学校に通うのが楽しい。好きな勉強は「体育」!

みなさん元気ですか?ぼくは、元気です。

幾世橋小学校で仲の良かった友だちとは、手紙のやりとりをしているし、3年生のときの担任だった先生からは「学級だより」も送ってきてもらっているから、さびしくないよ。

地震の時に、こわくて泣いていた女の子たちもいたけど、もう元気になったかな?

早く、みんなに会いたいな。



▲日本で初めて誕生した自転車「三元車」を新聞紙で再現した模型の隣。

いまは、お母さんと妹2人の4人暮らし。お父さんは、一人で新潟県へ仕事に行っていてあまり帰ってこないの、ちょっとさびしい。でも、おじいちゃんとおばあちゃんは、別な建物だけど同じ桑折町の仮設住宅にいるから。

誕生日にはPSPのゲームがほしい。新しい自転車もほしいけど、外で遊べないから。

もし、外で遊べるなら、一番はサッカーボールがほしい。

浪江に帰ったら、ワンピースの全巻と集めていたフィギュアを持ってくること。置いてきちゃった自転車も取ってきたい。

それから、みんなとたくさんサッカーがしたい。



福島県

## 瀬賀 範真さん

取材者：特定非営利活動法人  
市民公益活動パートナーズ 古山

### 先の見通しが立たない現実にも、 慌てないでと心がける



▲まもなく二本松市内の仮設住宅へ入居する瀬賀さん

闘病中の妻、結婚式を控えた息子。ただでさえ心労が重なる中で震災が起きた。最愛の家族と連絡も取れない中での避難指示。津島で会社や商店を営む瀬賀範真さんは、現実にと向き合っている。

大熊町の大病院に入院中の家内の看病を次男と長女に任せて、津島の自宅に戻った日、3月11日に地震はおきました。電話連絡も取れず、家族が再会できたのは、2つ目に転院した二本松市内の病院でした。震災が起きてから4日後のことでした。自衛官の長男が、5月に予定していた挙式も延期し、3月末、妻は他界しました。きちんと葬儀ができたことだけでも、ほっとしています。

のかたわら、県内外へ避難した役員をしている商工会の会員向けの情報提供なども行ってきました。土湯温泉の旅館に避難したのは、5月の声が聞こえる頃。この先どうしていくのか、計画の立てようがないのが現状です。約3カ月過ぎた避難先の土湯温泉ホテルに対して、本当によくしてもらって感謝しています。いつまでも過去を考えるのではなく、非常時のときこそ冷静にと心がけています。

## 岡 裕美さん

取材者：特定非営利活動法人 市民公益活動パートナーズ 古山

### 友だちに会いたい

浪江町苅宿地区に父方の祖母、父母、姉と住んでいたが、3月14日、周りの人たちよりもやや遅れて福島市に避難。現在は父母、姉との4人で暮らす。当初はあづま運動公園に近い母方の祖母の家で10日間過ごし、その後、現在の上浜町の家に移居した。



福島県

浪江の友だちのみなさん福島に来てください。メールや電話も待っています。上浜町の一軒家では、入居当時から近所の方々に食べ物や家電製品などの差し入れをいただいたり、母方の親戚からも野菜の差し入れがあり、本当に助かりました。父は今、いわき市に単身赴任をしており、週末には福島に帰ってきます。母は霊山町で、また姉は介護福祉士として福島市内で仕事をしています。私は、3月1日に高校を卒業し、すでに仙台市長町の専門学校で作業療法士の勉強を3年間することになっていましたので、今は福島からはJRで通学をしています。仲の良い友だちは、就職の関係もあって茨城や栃木、東京に移ってしまい、震災後まったく会えないので、ときどき電話やメールをするけれど、やっぱり会いたいです。思います。それと、小学生のころから飼っていた犬を避難するときに置いてきたのですが、母が一時帰宅をしたときにはすでに亡くなっていて、とても悲しかったです。高校の陸上部ではマラソンをして、福島駅伝の代表を務めました。母もマラソンを始め、最近では夕方や夜、家の近くを走ったりしています。

ます。今度、あづま陸上競技場で行われる県総体に相双地域の後輩を応援に行くので、そのときに何人かの友だちに会えるかもしれません。浪江町は、緑が豊かで地域の人たちの仲がとていいんです。町をあげてのお祭りも盛んです。11月下旬の十日市や2月の裸参りなど毎年楽しみにしていました。母たちが福島に避難している人たちと一緒に、もうすぐ四季の里でパークキューをやるらしく、楽しみにしています。浪江の家は農家なので、周りは田んぼや畑で、隣のお家とはだいぶ離れていました。でも、福島は両隣が家ばかりですし、蒸し暑いのも結構大変です。そういうえば、今年は家で作ったスイカが食べられないのが残念です。でも、いいこともありました。いつもの年だったら5月は田植えでとても忙しいのですが、今年は家族みんなであちこちへ遊びに行きました。花見山、裏磐梯。山形の山寺にも。考えられなかったことだったので嬉しかったです。避難する前に、父と津波被害に遭った請戸の様子を見に行きました。いつも見ていた景色のあまりの変わり様に呆然としました。帰



▲明るくいかなきゃ!

ることができたなら、復興のお手伝いをしたいと思っています。「今はみんなに会えないからつらいけれど、いつか浪江に帰れるときが来るから、それまでお互い頑張りましょう」と、浪江町のみんなに言いたいです。



東京都

## 下河邊行高さん・由美子さん

取材者：高崎経済大学 櫻井研究室 櫻井・竹内・篠木  
取材日：7月17日

### 地域産業の再興による雇用創出こそが必要 まちの復興の役に立ちたい

震災後、親族12名と一緒に東京の親戚を頼って避難。7月から現在の西東京市に中学生の次女と3人で住む。大学院生の長男、専門学校生の長女とは離ればなれて暮らしている。行高さんは、福島県内で自社の再興に向けた準備のため東京と福島を往復する日々を送る。



▲(左から) 行高さん・姉の高木道子さん・由美子さん  
故郷から届いた地酒 壽・地縁復興純米酒を手に

いまは収入の無い中で、都内のアパートの家賃の支払い、二人の子どもへの仕送りなどが大変です。でも、今回の震災の経験から、親戚縁者から本当に支えていただき、人の恩の温かさを心の底から実感しています。浪江町の素朴な暮らしの中にあつた人のつながりの強さというものもいつか必ず取り戻したいです。

震災の前は、コンクリート二次製品の会社を経営し、エコリサイクル製品の開発などを進め、まさにこれからというときでした。ショックはありますが、後ろ向きになるのではなく、自分にできることをやっていきたいです。現在は、福島県内での事業再開をめざし、県の補助事業や中小企業庁との交渉を進め、ようやくその見通しが立ってきました。浪江町ので地域産業の再生に向けては、商工会青年部など若い人を中心に復興への機運は強いと思います。こうした人材や熱意を活かし、地域に根ざした産業を再生して働く場所を確保することこそが町の復興に結びつくと考えています。地元の方々の再雇用を実現しながら浪江町の役に立ちたい。そんな思いです。



栃木県

## 地域のつながりが取り戻せる日が来ることを願う

## 森 美恵さん

取材者：高崎経済大学 櫻井研究室 櫻井・山本・亀井  
取材日：7月9日



▲森美恵さん、優仁くん(小2)、母シゲ子さん

震災後、津島中学校から郡山市内の高校、そして父の会社を頼って千葉市に移ったあと、3月下旬から栃木県小山市内にある現在のアパートに個人契約で入居。母と息子と3人で暮らしている。

いつも気にかけているのは、やはり子どものことです。小学校2年生になる優仁は、最初こちらの小学校が全校生徒886名という大規模校のためか慣れない様子でした。また親としては、小児科の病院が以前のようになつたので落ち着いてきた。むしろ大震災から4カ月が経つ今、息子が少し大人になつたように思え心強さもありません。現在のアパートの住まいは、近隣の方との付き合いもほとんどなく、住宅が密集しているせいか息苦しい感じがします。1年後にはどこか落ち着ける場所に移りたいと、家族では話し合っています。それがどこになるのかはまだ分かりません。浪江に戻りたいという気持ちはありますが、子どもの安全のことを考えると不安も多いです。

ふり返ると、浪江では近所の方とのつながりも強く、水田や自然に囲まれ暮らしていた生活が思い出されます。毎年1月に船で沖に出る出初式、かつて私の父も活躍した野馬追、そして

十日市などが懐かしいですね。新鮮なワカメ、おいしいカツオのお刺身なども食べたいですね。私たちの住んでいた北棚塩地区の隣組で支え合う関係も大切な思い出です。この『浪江のこころ通信』のように、浪江のつながりを大切にしようとする取り組みがあることは、とてもありがたいことです。北棚塩行政区の佐々木区長さんは、区の住民同士が情報を共有できるようにと、皆さんの連絡先を発信しています。幾世橋小学校で息子の担任だった三瓶先生は、「学年だより『ねえ、きいて』」を自ら発行され、子どもたちの素直な言葉を届けられています。地域の皆さんや友だちのつながりを途絶えさせないようにとの努力には、私の母と一緒にとても感謝しています。お互いが今どうしているのかを確認できることで安心できます。知らない土地で暮らしているのではおさらかもかもしれませんが、お互いのことを親身になつて助け合う地域の強い絆が、浪江にはあつたことを改めて実感しています。そうしたつながりを取り戻せる日が来ることに希望をもってこれから頑張っていきたいと思います。



埼玉県

## 泉田 海斗くん(小4)

取材者：高崎経済大学 櫻井研究室  
櫻井・山本・亀井  
取材日：7月9日



海斗君はお父さんの実家に近い群馬県高崎市に避難し、そして現在は埼玉県羽生市にご両親と3人で暮らす。津波で体調を崩した祖父と祖母は高崎市に残り、中学生のお兄さんは喜多方市にある中学校の寮にいて、家族は離ればなれとなっている。

### 海の見える請戸に 必ず戻りたい

最初に避難していた高崎市城山地区の小学校は1カ月くらいで転校しました。今通っている小学校でも友だちがたたくさんできて、元気に楽しく過ごしています。いつも友だちと自転車に乗ったり、ゲームをしたりして遊ぶことが多いです。浪江にいたときは、お父さんも指導していたスポーツ少年団で柔道を頑張っていました。今は、羽生市の柔道会に入ってお父さんと一緒に練習しています。

まず卒業式もまだしていません。7月30日に請戸小学校の「卒業生を励ます会」があるので、そこで友だちや担任の武内先生に会えることが楽しみです。

請戸の浜祭りのとき、砂浜の宝探しやホッキ貝拾いをして砂浜で遊んでいたことも楽しかったです。けれど、ここには海がないのでそれはできません。「いつか必ず請戸に戻って元の場所で暮らしたい。」そう強く思っています。